

校内におけるSSHの組織的推進体制

総合理学・探究部長 繁戸 克彦

SSHにおける研究開発を効率的かつ効果的に行うためには、数学・理科教員など担当教員だけでなく、全校の教職員の協力や校長をリーダーとした学校全体としての組織的取組の推進が不可欠である。学校全体として組織的に研究開発に取り組む体制や、それを支援する体制は第3期までの指定期間でほぼ構築された。第4期では、普通科の探究活動の推進のため組織改編を行っている。

1.1. 本校の研究推進体制とその経緯

校内に「SSH運営委員会」を設置し、SSH事業全体を推進する。SSH主対象生徒である総合理学科の運営やカリキュラム改良等については「総合理学科推進委員会」を設置する。また、SSHの事業の推進と総合理学科の運営について担当する校務分掌として「総合理学部」を設置し、SSH事業全体を牽引するとともに総合理学部長が総合理学科長も兼任し、SSH事業とその主対象生徒である学科の連携を密にとる体制とする。

2018年度までは普通科の探究活動を推進する校務分掌として「総合的な学習の時間推進部」を設置し、総合理学部とともに探究活動の全校的な推進を図る体制をとっていた。SSH事業の指定を長く受け、課題研究等の探究活動について研究を続けてきたそのノウハウを普通科の探究活動に取り込み、さらなる発展を目指すため、昨年度から「総合理学・探究部」としてその任にあり、「総合的な探究の時間」を運営する。

また、「研究倫理委員会」を設け、「兵庫県立神戸高等学校研究倫理規定」に基づき課題研究普通科探究活動(神高探究)の活動において倫理上の懸案事項を審査する。

1.2. 研究開発組織

SSH運営委員会 委員長 校長 副委員長 教頭

委員 事務長、主幹教諭、総務・広報部長、教務部長、進路指導部長、図書部長、総合理学・探究部長、
総合理学・探究部次長、各教科主任(国語、地歴・公民、数学、理科、外国語)

総合理学科推進委員会 委員長 総合理学・探究部長

委員 校長、教頭、総務・広報部長、教務部長、進路指導部長、各学年主任、総合理学科各学年学級担任

総合的な探究の時間検討委員会(サイエンス探究にかかわる委員会) 委員長 総合理学・探究部長

委員 教頭、教務部長、進路指導部長、総合理学・探究部次長、総合的な探究の時間推進課長、
各学年副主任、各学年総合的な探究の時間担当者

研究倫理委員会 委員長 教頭

委員 総合理学・探究部長、総合理学・探究部次長、理科(生物)担当者、
総合理学・探究部総合的な探究の時間推進課長

総合理学・探究部

総合理学・探究部長、次長、推進課長、研究企画課長、総合的な探究の時間推進課長、部員4、事務員1
(経理等の事務処理は、事務長の監督下にSSHで雇用した事務員が主として行う。)

1.3. 教員間の連携・他の専門部との連携

1.3.1. 「課題研究」における教員の連携

担当教員8名の集団指導体制と外部人材活用のための連絡調整係1名の計9名で総合理学科2年40名の生徒を指導した。

1.3.2. 「科学英語」と「サイエンス入門」における教員の連携

英語科教員2名とALT2名に理科教員2名を加えて、チームティーチングで行うことにした。これにより英語科と理科の教員の連携し、他の英語科教員の「科学英語」の授業のねらいだけでなく、SSHの取組全般に関する英語科教員の理解も高まった。プレ課題研究の成果を「科学英語」でのポスターセッション。「科学英語」で実施する英語での生徒実験では、理科の教員が関わることにより、科学的で教育的に安全な実験プログラムが開発された。

1.3.3. 普通科総合的な探究の時間「神高探究」における教員の連携

本年度は国語(2名)、地歴・公民(3名)、数学(1名)、理科(5名)、英語(1名)、体育(2名)、家庭(1名)、芸術(1名)の16名で講座を担当し、全体の運営を総合理学・探究部の5名(地歴・公民1名、理科1名(講座担当兼任)、数学1名、情報1、実習助手1名)で行った。毎週の担当者会議によって共通理解を図るとともに、SSH成果の普及を図った。また、担当者の会議には管理職である特任専門官が加わり、20名での運営体制を取った。

普通科探究活動にサポーター制度を導入(担当以外の校内全教員に各班(約70)のアドバイザーとしてサポーター登録を依頼し、全校での指導体制の構築を図った。

2月10日に実施した全校生参加の「神戸高校探究活動発表会」には全教員が参加している。

1.3.4. 兵庫「咲いテク」における教員の連携

本年度は「サイエンスフェアin 兵庫」では、現地開催は中止となったが、本校教員は19名が登録を行った。

1.3.5. 国際性の育成における教員の連携

国際理解教育委員会との協力の下、「シンガポール海外研修」の企画・運営、「さくらサイエンスプラン」を活用しての海外交流等を年度初めに計画していたが、コロナウイルスによる渡航制限等により実施できなかった。

1.3.6. 進路指導部、教務部との連携

進路指導部と関連した校内でのキャリア教育の一環であるSSH特別講義や卒業生を招集してのキャリアアップセミナーは実施できたが、京都大学学生を招集しての研修会などの計画は、コロナウイルス感染拡大防止の観点から実施が見送られた。

また、教務部とともに「総合的な探究の時間」について検討、現在2学年3単位からの時間配分の変更を検討している。

第4期指定から例年実施してきた授業研究協議会として、総合理学・探究部が主管する「情報管理委員会」主催のBYOD導入に向けた研修会を実施した。

1.4. SSH事業の評価検証体制

1.4.1. SSH事業に係る生徒・保護者アンケートによる評価

SSH主対象生徒である総合理学科生徒、自然科学研究会、数学研究会所属生徒だけでなくその保護者、全校生徒とその保護者に向けてアンケートを実施その結果を詳細に分析し、次年度以降のSSH事業の改善・推進のための資料とする。（研究開発の成果と課題を参照）

1.4.2. SSH運営指導委員の評価

SSH運営指導委員会で、事業の進捗状況と問題点を提示、委員から指導・助言を受け、事業の改善に努めた。

（V03章運営指導委員会報告を参照）

1.4.3. 学校評価アンケートによる生徒・保護者の評価

年度末に学校評価アンケートの質問にSSH事業についての項目を設け、全校生と全保護者から評価を受けその変容を追跡し、事業に改善につとめる。理科の授業では、学科だけでなく普通科理系クラスでも実験を多く取り入れ、SSH事業による高度な機材を使っ実験を体験したこと、保護者に対してSSH通信を閲覧してもらうよう働きかけたことでホームページ上のSSH通信によるSSHプログラムの参加呼びかけが浸透し、SSH特別講義や重点枠で展開する各種プログラムに総合理学科だけでなく普通科の生徒も多く参加したことなど、普通科への成果普及効果が、4期目の年度を経るごとに特に生徒の評価に顕著に表れている。

		生徒					保護者				
		4期目				3期	4期目				3期
		R3	R2	R1	H30	H29	R3	R2	R1	H30	H29
6 スーパーサイエンスハイスクール (SSH)事業の指定を受けていることは、学校の教育活動にとって、効果的だと思いますか。	1年	3.2	3.2	3.2	2.8	2.9	3.4	3.4	3.4	3.2	3.4
	2年	3.2	3.0	3.0	2.8	2.7	3.3	3.4	3.3	3.2	3.1
	3年	3.2	3.0	2.9	2.7	3.2	3.4	3.2	3.2	3.1	3.2
	合計	3.2	3.1	3.0	2.8	2.9	3.3	3.3	3.3	3.2	3.2

1.4.4. 学校評議委員からの評価

年度末(3月24日予定)の学校評価アンケートと学校評議委員への事業説明を行い、委員から指導・助言を受け、事業の改善に努める。

1.4.5. 卒業生からの評価

SSH主対象生徒であった卒業生のアンケートを行い、事業の改善に努める。（III2章卒業生追跡調査を参照）